

第1章 マルセイユ——帰港

1815年2月28日^{*}、ノートル＝ダム＝ド＝ラ＝ガルドの丘にある船舶監視所から、スミルナ、トリエステ、ナポリを経由した三本マスト船、ファラオン号が入港するという連絡が入った。

いつもどおり、水先案内人が一人すぐに港を出て、イフ城をかすめるように通ってモルジウ岬とリオン島の間でその船に乗り込んだ。

たちまち、これまたいつもどおり、サン＝ジャン砦の見晴し台に大勢のやじ馬が集まった。というのも、マルセイユでは船の入港、特にファラオン号のように、古いフォセ地区の造船所で建造され、艀装^{せうさう}され、荷を積み、町の船主が所有している船の入港は大事件だったからである。

この間にも船は進んでいた。カラサレーニュ島とジャロス島の間に火山性振動のようなもので陥没してできた隘路^{あいろ}を巧みに通過し、ボメグ島を回り込んだ。そして3枚の中櫓帆^{ちゅうりょう}、船首三角帆、後櫓縦帆^{こうりょうじゅう}だけで進んでいたが、その進み方が実にゆっくりと、悲しそうだったので、やじ馬たちは、不幸を予感^{いぶか}する本能を働かせ、船上で一体どのような事故が起こったのかと訝^{うたが}っていた。しかしながら、航海の玄人^{けん}たちには、たとえ事故が起こったとしても、船体そのものに関わるものではないということが見えていた。なぜなら、その船は、あらゆる点で完璧に制御された船の状態を維持して進んでいたからである。つまり、錨^{いかり}は投錨^{ちやういかり}態勢にあり、船首斜櫓^{せうしやうり}の横静索^{よこせいさく}は外されていた。そして、マルセイユ港入口の狭い水路にこれからファラオン号を通そうとしている水先案内人のそばには一人の若者がいて、きびきびした仕草と油断のない眼差しで船の動きを見守りながら、逐一案内人の命令を復唱^{ふくたう}していた。

群衆の中に漂っていた漠然とした不安は、サン＝ジャン砦展望台にいた見物人の一人に特に強く感じられ、彼は船が港に入るまで待つことができなかった。彼は一艘のボートに飛び乗ると、ファラオン号に向かって漕いで行くように命じ、待機用小湾の前で船に行き会った。

この男が来るのを見た若い水夫は、水先案内人のそばの自分の持ち場を離れ、帽子を取ると舷側に来て身を乗り出した。

^{*} 「ジュルナル・デ・デバ」紙1844年8月28日号の連載第1回には「2月24日」と印刷されていたが、8月31日号連載第3回目にデュマは脚注で、それは誤植であって、正しくは「2月28日」だと訂正している。この点に限り、本訳書は底本を変更し、原作者の指示に従う。



ファラオン号

それは18歳から20歳の若者で、背が高く、すらりとした体つきで、黒いきれいな目をして、髪は真っ黒だった。その人となり全体に幼い頃から危険と戦うことに慣れた人間に特有の、冷静かつ決然とした雰囲気が漂っていた。

「おお、君か、ダンテス！」とボートの男は叫んだ、「なにがあつたのだ、なぜ船全体がこんな悲しげな雰囲気に包まれているのだ？」

「大変な不幸が起こったんです、モレルさん！」と若者は答えた、「大変な不幸です、特に私には。チヴィタ＝ヴェキア付近で、ルクレール船長が亡くなられたんです」

「それで積荷は？」と船主は急き込むように訊ねた。

「無事に着きました、モレルさん、その点ではご満足いただけます。ですが、あの不幸なルクレール船長が…」

「一体彼になにが起こったのだ」と船主は訊ねたが、ほっとした顔つきだった、「一体なにが起こったのだ、あの律義者の船長に？」

「亡くなられたんです」

「海に落ちたのか？」

「いいえ、脳膜炎で、ひどく苦しみながら亡くなられたんです」

それから、部下たちのほうへ振り向くと、



マルセイユ港

「さあ、投錨準備、各人部署につけ！」と言った。

水夫一同は従った。彼ら8人か10人のうちの、ある者は帆脚索に、ある者は転桁索に、またある者は上下動索に、あるいは船首三角帆索に、ほかの者は絞帆索に一齐に取りついた。

若い水夫は操船のこの初動作業を余裕たっぷりにちらりと眺め、自分の命令が実行されているのを見て取ると、また話の相手のほうへ戻ってきた。

「で、その不幸はどんな風に起こったのだ？」と船主は、若い水夫が話を中断したところから会話を再開した。

「なんと言ったらいんでしょうか、まったく予測もできませんでした。港の司令官と長いこと話をなさったあとで、ルクレール船長はとても興奮した様子でナポリを出港されたんです。その24時間後に発熱されました。そして3日後にはもう亡くなられていました…」

私たちは船長のために習わしどおりの葬儀を行いました。船長は今、丁寧にハンモックにくるまれ、足と頭にそれぞれ36リーヴルの錘をつけられてジリオ島のあたりに眠っておられます。奥さまのために十字勲章と剣は持ち帰りました。イギリス人相手に10年も戦ったあとで」と若者は暗いほほ笑みを浮かべて続けた、「結局は普通の人

間と同じようにベッドで亡くなるんですね」

「当然だよ！ 仕方のないことだ、エドモン」と船主が話を引き取ったが、彼はますます諦めのついた様子だった、「人はみんな死ぬものだ、そして古い人間は新しい人間に場所を譲らなくちゃならん、そうしないと進歩はない、君が請け合ってくれた以上、積荷は…」

「大丈夫です、モレルさん、私が保証します。この航海は、私の考えを言わせていただければ、2万5000フラン以上の利益を上げるでしょう」

ちょうどそのとき、船が砦の円塔の近くを通過したので、
「主樺帆、船首三角帆、後樺縦帆の絞り方用意！」と若い水夫は叫んだ、「絞り方始め！」

命令は、軍艦の上のように迅速に実行された。

「絞帆下ろせ、全帆絞れ！」

最後の命令で、すべての帆が下ろされ、船の進み方はほとんど感じられなくなり、わずかに惰性で動いているだけとなった。

「それでは、モレルさん、どうぞ乗船なさってください」と、船主の逸る心持ちを見て取って、ダンテスは言った、「ほら、ちょうど経理係のダングラールが船室から出てきます、お知りになりたいことは彼がすべて教えてくれるでしょう。私は投錨を監督し、船に服喪の形をとらせないとなりませんので、これで」

船主は二度は言わせなかった。ダンテスが投げたロープをつかみ、海の男と呼ばれてもいいほどの巧みさで、船腹のふくらんだ部分に打ちつけられた梯子をよじ登った。一方、ダンテスは副船長の持ち場に返って、彼がダングラールと呼んだ男に話し手の役を譲ろうとし、実際この男も船室から出ると船主のほうへ歩み寄ってきた。

新しく現れた男は、年齢25,6歳で、かなり陰気な表情をし、目上にはおもねり、目下には傲慢な人間だった。したがって、そもそも水夫たちに嫌われる原因である経理係という肩書きも加わって、乗組員一同からはよく思われていなかった。それに引き換え、エドモン・ダンテスは皆から愛されていた。

「それじゃ、モレルさん、もう例の不幸のことはご存じというわけですね」とダングラールが言った。

「そう、知っている。ルクレール船長も可哀想なものだ！ 律儀で、正直者だったのに！」

「そして、とりわけ空と海の間で齢を重ねた優秀な船乗りでした、モレル父子商会ほどの大きな会社の利害をまかせるにはうってつけでしたよ」とダングラールは答えた。

「だが」と、投錨場所を探しているダンテスを目で追いながら船主は言った、「だがな、この仕事をこなすのに君の言うほど年を取る必要はないとわたしには思えるのだ、ダングラール、ほら、われらがエド

モンを見たまえ、わたしには彼はきちんと仕事をこなしているように見える、だれの助言もいらない一人前の男じゃないか」

「そうですね」とダングラールは横目でちらりとダンテスを眺めて言ったが、その視線には憎悪が閃いた、「そうですね、若い、そして怖いものなしです。船長が亡くなるか亡くならないうちに、だれにも相談しないで船の指揮を執り始めたんですからね、それに、まっすぐマルセイユに戻る代わりにエルバ島で一日半も無駄にしたんです」

「船の指揮を執るのは」と船主は言った、「副船長としての彼の義務だ。だが、エルバ島で一日半無駄にするというのはまずかったな、船にどこか具合の悪いところがあって、それを修理するためだったなら、話は別だが」

「船は私みたいにぴんぴんしていました、モレルさんもそうであることを願いますがね。それにその一日半というのがまったくの気まぐれに使われたんです、ただ彼が上陸したいだけだったんです」

「ダンテス」と船主は若者のほうに振り向いて呼んだ、「ちょっとここに来てくれないか」

「すみません、モレルさん」とダンテスは言った、「すぐ参ります」

それから水夫たちに「投錨！」と叫んだ。

たちまち錨は落とされ、鎖が音を立てて引っ張られた。ダンテスは、水先案内人がいたにもかかわらず、この操作が終了するまで彼の部署に留まった。それから、「船旗をマスト中間まで下げよ、国旗を半旗にして、帆桁を交叉！」と命令した。

「おわかりでしょう」とダングラールは言った、「もう船長気取りですよ」

「事実、船長なんだからな」と船主。

「そうです、モレルさんの署名と共同経営者の署名があればですが」

「決まっているじゃないか！ 彼をこのまま船長にしないって法があるものか！」と船主は言った、「確かに彼は若い、だが、わしの見たところ、この仕事に全精力を注いでいるし、実に経験も積んでいる」
ダングラールの額に陰がよぎった。

「すみませんでした、モレルさん」と言いながらダンテスがやってきた、「投錨が完了しましたので、なんなりとお訊ねください。確か、お呼びになりましたよね？」

ダングラールは一步あとに退いた。

「わたしはなぜ君がエルバ島に寄ったのか訊きたかったのだよ」

「私にはよくわかりません、モレルさん。ルクレール船長の最後の命令に従ったのです。船長は死ぬ間際に私に包みを一個渡して、ベルトラン大元帥に届けるようにと言われたのです」

「で、君は会ったのかね、エドモン？」

「だれにですか？」

「大元帥だよ」
「ええ、お会いしました」
モレルは周囲を見回し、ダンテスを脇に引き寄せた。
「それで皇帝陛下はいかがされている？」と彼は性急に訊ねた。
「お体の調子はよさそうでした、私の見た限りでは」
「というと、皇帝陛下にも君は会ったのだね？」
「私がいるときに元帥のお部屋に入ってこられたのです」
「で、君は陛下に話したのかね？」
「というより、皇帝陛下のほうが私に声をかけられたのです、モレルさん」とダンテスは微笑しながら答えた。
「で、陛下は君になんておっしゃった？」
「船のことをいろいろお訊ねになりました、いつマルセイユに向けて出発したのかとか、どこを通ってきたのかとか、積荷のことなど。私の思うに、もし船が空で、私が持主だったら、船を買い取るおつもりだったのでしょう。しかし、自分は単なる副船長にすぎず、船はモレル父子商会の所有だと申し上げました。すると、陛下は、おう、おう、その商会なら知っている、モレル家は代々船主で、自分がヴァランスの駐屯地にいた頃、同じ連隊で軍務についていたモレルが一人いたぞ、とおっしゃいました」
「いや、まったくそのとおりだ！」と船主は愉快そうに叫んだ、「それはわしの伯父のポリカール・モレルのことだよ、彼は大尉にまでなったのだ。ダンテス、皇帝陛下が彼のことを憶えていたと君が伯父に言ってやったら、あの偏屈な年寄りは涙を流して喜ぶぞ。わかった、わかった」と船主は若者の肩を親しげに叩きながら続けた、「君がルクレール船長の指示に従ってエルバ島に停泊したのはまったく正解だったよ、ダンテス、たとえ、君が元帥に包みを渡し、陛下と話したということが知られると、君の身が危うくなるかもしれないとしても、だ」
「どうして私の身が危うくなるんでしょうか、モレルさん？」とダンテスは言った、「私は自分がなにを持って行ったのかさえ知りませんし、皇帝陛下が私になさった質問はだれにしてもいいような質問でした。ああ、失礼、検疫官と税関吏がこちらに着きましたので、ちょっと失礼します」
「いいとも、いいとも、ダンテス君」
若者は遠ざかり、それにつれてダングラールが近寄ってきた。
「どうでした？」と彼は訊いた、「ポルトー＝フェラージョに停泊したちゃんとした理由を言ったようですね？」
「立派な理由があったのだよ、ダングラール君」
「おお、それは結構」とダングラール、「同僚が務めをきちんと果たさないのを見るのは、いつだって気持ちが悪いもんですからね」

「ダンテスは彼の務めを果たしたのだ」と船主は答えた、「文句のつけようがない。あの停泊はルクレール船長が彼に命令していたことなのだから」
「ルクレール船長といえば、あなたに船長からの手紙を渡しませんでしたか？」
「だれが？」
「ダンテスですよ」
「わしに？ いや、もらっていない！ では、彼は手紙を預かっていたのか？」
「私はてっきり、包みのほかにルクレール船長は彼に手紙を一通託したと思っていました」
「どの包みのことを言っているのかな？ ダングラール」
「もちろん、ダンテスがポルトー＝フェラージョに寄って置いてきた包みですよ」
「なんだったって君は彼がポルトー＝フェラージョに運ぶ包みを持っていたと知っているのだ？」
ダングラールは赤くなった。
「私が船長室のドアの前を通りかかったら半開きになっていたんで、船長がその包みと手紙をダンテスに渡すのが目に入ったんです」
「彼はそのことはわしに言っていない」と船主、「だが、その手紙を持っているなら、渡してくれるだろう」
ダングラールはちょっと考え込んだ。
「それじゃ、モレルさん、お願いですから」と彼は言った、「このことはダンテスには言わないでください、私がまちがっていたようですから」
そのとき、若者が戻ってこようとしていたので、ダングラールは遠ざかった。
「それじゃ、ダンテス君、暇になったかね？」と船主は訊ねた。
「はい、大丈夫です、モレルさん」
「用事は長くかからなかったようだな」
「はい、税関に積荷の目録を出しましたし、港の積荷保管所は水先案内人と一緒に一人よこしていましたので、彼に書類を渡しました」
「ということは、君はもうここではなにもすることはないということかな？」
ダンテスは素早く周囲を見回した。
「はい、すべて片がつきました」と彼は言った。
「それじゃ、わしらと食事を一緒にできるかい？」
「申し訳ありません、モレルさん、本当に申し訳ないのですが、まず父のところに行かねばならないんです。お誘いいただいたのは実に光栄で、感謝しています」

「もっともだ、ダンテス、もっともなことだよ。君が孝行息子だっ
てことをわしは知っているからね」

「それで」とダンテスは幾分ためらいながら訊いた、「父は元気で
しょうか？ もし、ご存じなら」

「そう思うよ、エドモン君、もっとも、わしは会ってはおらんが」
「そうでしょう、小さな部屋に閉じこもっているということですか
ら」

「ということは、君のいない間、少なくともお父さんがなにかに不
自由したことはなかったということだ」

ダンテスは微笑した。

「父は自尊心が強いんです、モレルさん、ですから、たとえすべて
が足りなくても、神さまは別として、だれかにものを頼むことはしな
いでしょう」

「そうかい、わかった！ じゃ、その訪問のあとで来てもらうことに
しよう」

「もう一度申し訳ありません、モレルさん、ですが、父を訪ねたあ
とで、もう一つ私にとってとても大事な訪問があるんです」

「ああ！ そうだった、ダンテス、すっかり忘れていたよ、カタルー
ニャ村に、お父さんと同じくらい君に会いたがっているだれかがいた
んだ、美人のメルセデスがね」

ダンテスは微笑した。

「そうか！ そうか！」と船主は言った、「それでわかったぞ、彼女
が3回もファラオン号の消息を訊きに來たわけが。いやはや！ エド
モン、君も隅に置けないな、すごい美人の愛人じゃないか！」

「愛人ではありません、モレルさん」と若い水夫は重々しく言っ
た、「私の許婚です」

「ま、ときには同じことだが」と船主は笑いながら言った。

「私たちはそうではありません、モレルさん」とダンテスは答えた。

「そうかい、そうかい、エドモン」と船主は続けた、「とにかくわし
は君を引き留めんよ、君は十分わしの仕事をやってくれたんだから、
今度は君に自分の仕事をやる暇を与える番だ。金が必要かね？」

「いいえ、モレルさん。ほぼ3か月分の給料にあたる今度の航海手
当がそっくりありますから」

「君はしっかり者だな、エドモン」

「私には貧しい父親がいますからね、モレルさん」

「わかった、わかった、君が孝行息子だっことは知っている。さ
あ、お父さんに会いに行きなさい。わしにも一人、息子がいるが、3
か月の航海から戻った息子をだれかが遠くに引き留めていたら、わし
だってそいつをひどく恨むだろうよ」

「じゃ、よろしいでしょうか？」と若者は会釈しながら言った。

「結構、で、そのほかにわしに言うておくことはないかな？」

「ありません」

「ルクレール船長は死ぬ間際にわし宛ての手紙を君に託さなかった
かな？」

「船長は手紙を書ける状態ではありませんでした、モレルさん。た
だ、それで思い出したんですが、私は2週間の休暇をお願いしなけ
ればなりません」

「結婚するためかね？」

「まず、そうですが、そのあとパリにも行きます」

「よし、よし！ 好きなだけゆっくりしてきなさい。積荷を下ろすの
に6週間はかかるだろうし、次に船出するのは早くとも、3…、そう
だ、3か月後に君にはここにいてもらわなくてはならん。ファラオン
号は」と青年水夫の肩をぽんと叩いて船主は言った、「船長なしでは
出港できないからねあ」

「船長ですって？」と喜びに目を輝かせてダンテスは叫んだ、「本気
でおっしゃっているのでしょうか、モレルさん、というのは、私の心
の最も秘密の夢を叶えるようなことをおっしゃったんですから。私を
ファラオン号の船長に任命してくださるおつもりですか？」

「わしだけなら、この場で君に手を差し出して、決まりだ、と言う
ところだが、わしには共同経営者があってな、イタリアの^{ことわざ}に言うよ
うに、《共同経営者を持つのは主人を持つと同じ》というわけなの
だ。しかし、少なくとも手続きの半分は終わったも同然だ、つまり、
必要な2票のうち、君はすでに1票を確保したのだから。もう1票
についてもわしにまかせておいてくれ、できるだけことはするよ」

「ああ、モレルさん」と若い水夫は目に涙を浮かべ、船主の手を握
りしめて叫んだ、「モレルさん、私の父とメルセデスの名においてお
礼申し上げます」

「いいよ、いいよ、エドモン、正直者を天の神さまはちゃんと見て
いてくださるのだ、ほらほら、早くお父さんに会いに行きなさい、メ
ルセデスに会いに行きなさい、そのあとでわしのところに戻ってくる
んだ」

「ですが、私が陸までお連れしなくていいでしょうか？」

「いや、結構。わしはここに残ってダングラールと経理の処理をし
なくてはならん。航海の間、君はダングラールには満足していたか
ね？」

「ご質問の意味にもよりますね、モレルさん。それが、もし、いい
友人だったかという意味ならば、満足していません、というのは、私
の思うに、彼は私が好きではないんです、二人の間に起きたちょっと
した諍いのために、私が愚かにも無人のモンテ＝クリスト島にちょっ
と上陸してけりをつけようなどと言ってしまったあの日からです、こ

んなことを言い出したのは私が悪かったんで、彼が断ったのも当然でした。もし、経理係としてどうかという意味でご質問をなさったのなら、別に問題はなく、彼の仕事ぶりには満足なさと思います」

「だが、いいかい、ダンテス」と船主は言った、「君がもしファラオン号の船長だとしたら、喜んでダングラールを職に留めるかね？」

「船長になろうと副船長であろうと、モレルさん」とダンテスは答えた、「私は船主の信頼を得ている人間には常に最大限の敬意を払います」

「わかった、わかった、ダンテス、君はあらゆる点で律儀な青年だ。もうこれ以上引き留めないよ。さあ、行きなさい、行きたくてうずうずしているのがよくわかるよ」

「では、休暇をいただけるのですね？」

「行きなさいと言ってるんだよ」

「あのボートをお借りしてもよろしいでしょうか？」

「使いなさい」

「それでは失礼します、モレルさん、本当にありがとうございました」

「また会おう、エドモン君。幸運を祈るよ！」

若い水夫はボートに飛び乗り、船尾に座るとカヌビエール大通りに行くようにと命令した。二人の漕ぎ手はすぐにオールの上に身をかがめ、ボートはあらん限りの速度で、行き交う無数の小舟の間を縫い、停泊している船舶の群の間に空いた狭い通りのような水路を港の入口からオルレアン岸壁まで行った。

船主は微笑しながら目で追い、着岸して彼が岸壁の舗石の上に跳び移るのを見た。そして、彼はすぐに、この名高いカヌビエール大通りに朝の5時から夜の9時まであふれている雑多な群衆の中に消えて行った。マルセイユの人間たちはこの通りが非常に自慢で、「もし、パリにカヌビエール大通りがあったら、パリは小さなマルセイユになれるのに」などと言うのである。

船主が振り返ると背後にダングラールがいた。一見船主の指示を待っているように見えたが、実際は彼もまた目で若い水夫を追っていたのである。

ただ、同じ人物を追っていたこの二つの眼差しに表れた感情には大きな違いがあった。

第2章 父と子

憎しみの神と格闘しながら、船主の耳に同僚についての悪意ある推測を吹き込もうとしているダングラールはひとまず措いて、われわれはダンテスのあとを追うことにしよう。彼はカヌビエール大通りを端から端へ通り抜けたあと、ノワイユ通りへ進み、メヤン大通りの左側にある小さな家に入り、薄暗い階段を勢いよく5階まで上った。そこで片手で手すりにつかまり、もう一方の手で胸の鼓動を抑えながら、半開きになって小部屋の奥まで見えるあるドアの前で立ち止まった。

この部屋はダンテスの父親の住む部屋だった。

ファラオン号の到着の報せはまだ老人まで届いていなかったの^あで、老人は椅子の上に乗って、震える手でクレマティスの混じった金蓮花^{きんれんか}の棚を作っているところだった、それらの植物が窓の格子に沿って這い上がってきていたからである。

突然、彼は抱きすくめられ、よく知っている声が背後で聞こえた。

「父さん、父さん！」

老人は叫んで振り向いた。そして、息子を見ると、彼の腕の中で震えながら蒼くなってずるずると倒れた。

「どうしたの、父さん」若者は不安になって叫んだ、「病気の？」

「違う、違う、愛しいエドモン、わしの息子、わしの子供、違うよ、ただわしはおまえが来るとは思っていなかったんだ、だから、こんな風に突然おまえに会えたんで、うれしくて、胸がきゅっと締まるような感じがして…おお、神さま！ わしは死んでしまいそうだ！」

「それなら、早く治ってください、父さん！ 僕ですよ、まちがいはなく僕です！ 喜びは害を与えないってよく言われますから、予めにも知らせずに入ってきたんです。さあ、ちょっと笑ってください、そんな途方に暮れたような目で僕を見ないで。戻ってきましたよ、これからは幸福に暮らすんです」

「そりゃ、よかった、息子よ！」と老人は口を開いた、「だが、どうやってわたしたちは幸福に暮らせるのかい。おまえがもうわしを置いて行かないということかい？ さあ、さあ、おまえの幸福の話をしておくれ」

「ある家族の喪から生まれた幸福を僕が喜んで受けるのを神が赦してくださいますように！」と若者は言った、「しかし、神は僕がその幸福を願いはしなかったということをご存じです。それは降って湧いたように起きたので、僕には悲しむ暇さえなかったんです、あのご立